

アラブ社会における日本のアニメ・マンガの影響

保坂 修司 HOSAKA Shūji

近畿大学

はじめに

2006年3月、イラクの日刊紙、ザマーンが興味深いコラムを掲載していた。¹ 2003年にはじまったイラク戦争でサッダーム・フセイン政権が崩壊したあとも、イラクはいぜんとして混乱の極みにあり、占領軍たるアメリカ軍に対する攻撃（テロ）や宗派対立からの報復戦が収束する気配はまったく見えなかった。コラムのタイトルは「ああ、日本がわれわれを占領してくれたらなあ」である。

アメリカに代わって、日本にイラクを統治してもらいたい、とこのコラムの筆者が本気で考えているわけでは、むろんない。彼にとっての日本というのは「小さかったころからずっと、子ども時代の想像力の一部」であり、「日本人はいつもグレンダイザーやキャプテン・マージド（キャプテン翼）とともにわれわれといっしょにいた」のである。戦乱のイラクにおいてすら、日本はアニメやマンガの国であったし、おそらくそれは現在でもかわらないはずである。

サムライやキモノといった日本の伝統、さらには神風、原爆、そして第二次世界大戦後の奇跡的な復興、経済大国、ハイテクの国。欧米の植民地支配を受けてきたアラブ諸国にとっては、非欧米、非キリスト教の日本はつねに比較的拒否反応の出にくいモデルであった。しかし、これらのイメージはかならずしも日本人の顔の見えやすいものではなかったし、むしろ多分に友好という外交の建前なものにすぎなかった。いずれにせよ、経済や技術はモノというかたちで現れ、文化的な側面は欧米のフィルターを通してアラブ社会に投影されるのが一般的であった。

日本のアニメやマンガがアジアや欧米で人気を博すようになったことはすでにさまざまな媒体で紹介されている。アラブ諸国でもそれは例外ではない。そして、アラブ以外の国の場合と同様、アニメやマンガは、うわべのきれいごとにと終始しがちであった従来の日本のイメージの浸透のしかたとはおよそ異なるかたちで、大衆的な広がりをもちながら、同時に日本人の顔をはっきりと示し、公式・非公式複数のルートを通じて重層的に、そしてものすごいスピードでアラブ社会に溶け込んできているのである。

日本製番組の進出

日本のテレビ番組が本格的にアラブ世界に進出するのは1980年代以降と考えられている。当時、アラブ諸国のテレビでは自国産の番組だけではならず、欧米（とくに米）から多くの番組を輸入していた。しかし、欧米製の番組はアラブ各国に潜在する反欧米感情を

刺激し、また宗教的保守層からも反発を受けることが少なくなかった。また欧米的な、リベラルな価値観は場合によっては域内の独裁体制にとって脅威となる恐れがあり、畢竟、自国産の番組と欧米製の番組のあいだの緩衝材が必須となる。日本の番組は、南米製ソープオペラとともに文字どおり、地元番組と欧米の番組のあいだのカウンターバランスとして機能し、当初よりほとんど無抵抗・無批判のまま積極的に導入されていったのである。

NHKの「おしん」はまさにその代表であった。日本の経済進出とともに、日本への注目が高まるなか、欧米的価値観とアラブ・イスラームの価値観のあいだをつなぐものとして「おしん」はエジプトを含め中東で大きな人気を獲得した。「おしん」は経済面しか知られていなかった日本の別の側面を中東の人たちに知らせるうえで、きわめて大きな役割を果たしたといえる。

また、ほぼ同時期、「おしん」とはまったく異なる日本製テレビ番組がアラブ諸国で大きな人気を得ていた。アラビア語では「ヒスン（「砦」の謂）」の名で親しまれた「風雲たけし城」である。これは、ナンセンスなゲームショーで、のちに映画監督として中東でも有名になる北野武（ビートたけし）が出演していたが、その当時はそれで話題になることはなく、ほぼ番組内容の（いい意味での）くだらなさ、面白さだけで爆発的な人気を得ていた。

アラブ諸国での放映形態は日本のオリジナル番組のうえにアラビア語のコメントをかぶせただけのきわめて安直な作りであった（したがってオリジナルの日本語の音声も背後で聞こえる）。だが、コメントを担当したレバノン人俳優、リヤード・シャッターラの軽妙なしゃべりもあり、これもアラブ全域で大ヒットとする要因となった。

「おしん」にしる「風雲たけし城」にしる、アラブ諸国では一種の社会現象として放映当時から話題になったが、その影で別の動きも活発化していた。日本のアニメーション（以下日本製アニメーションはとくに断らないかぎり「アニメ」と略）の浸透である。アラブ諸国では、アニメーションは、子どもの見るもの、つまり大人の見るとはならないと考えられていたため、当時その意味を正しく理解する人は少なかった。

キャプテン・マージド

1980年代には数多くの日本製アニメがアラブ世界に進出していたが、なかでも特筆すべきは「キャプテン翼」のアラビア語版「キャプテン・マージド」のヒットであろう。「キャプテン翼」は日本やアラブ諸国だけでなく、全世界で子どもたちの人気を集めており、アラブ世界においても数シリーズ、そしてエジプト版、湾岸版など複数の版が存在する。なお、「マージド」はアラビア語では一般的な男性の名前だが、サウジアラビアの有名なサッカー選手、マージド・アブダラーの名前から取ったという説もある。

現在でもビデオ、DVD、VCD、衛星放送、さらには多くのキャラクターグッズなどを通じて「キャプテン・マージド」の名は人口に膾炙しており、アラブ世界でもっとも有名な日本のキャラクターのひとつと考えられる。

たとえば、インターネットのYouTubeで“Captain Majid”を検索すると、多数のア

ラビア語のビデオが YouTube にアップロードされていることがわかる。子ども時代への郷愁も含め、いまだに根強い人気といえる。

当時の日本製アニメーションは原則的にアラブ化されたかたちで家庭内に入ってきていた。キャプテン翼がキャプテン・マージドと改名されたのはその流れとみていい。現在でもそうであるが、日本のアニメは子ども向けと見なされていたため、教育上の配慮から劇中の言葉はアラブ人の声優によってすべて正則アラビア語（フスハー）に置き換えられている。こうした措置は教育的配慮だけでなく、政治的な配慮でもある。いずれにせよ、アラビア語への改名、アラビア語吹き替えによってアニメの日本の性格が希釈されたことは間違いない。しかし、この点ではいくつか興味深い現象が観察できる。

筆者は 1980 年代後半から 90 年代はじめにかけていくつかのアラブの国にある日本大使館で文化交流の仕事に従事していたことがある。当然、アニメも調査対象になっていたのだが、当時の印象では、アラブ人の大人たち（親）で、このキャプテン・マージドを日本製だときちんと認識していた人はあまり多くなかったと思う。日本の黒い学生服を着て、畳の部屋に座って、箸を使って食事をしているのに、アニメは子ども向けだという先入観をもち、画面を真剣に見ることが少なかった大半の大人たちには、そうした日本的な場面は単なる背景にすぎなかった。もちろん、子どもたちの多くはこのアニメが日本製であること、あるいは少なくともアラブではないことに気づいていただろう。

アニメーションを子ども向けと考えていた大人たちが気づかないうちに、日本製のアニメはテレビを通じてアラブの家庭のなかに深く静かに入り込んでいた。日本のアニメの進出にはいくつかの要因が考えられる。「おしん」のケースでもみられたように、ひとつは欧米の文化に対するカウンターバランスであり、もうひとつはアラブのテレビにおけるコンテンツ不足である。

また日本製アニメは子ども向けと考えられたために、欧米製番組と比較して拒否反応が少なく、より受け入れやすいと考えられた可能性は高い。アニメが無国籍、多国籍的な性格をもっていたことも重要であろう。

ちなみに YouTube にアップロードされた「キャプテン・マージド」のビデオに対し、多数のコメントが投稿されているが、そのコメントを読めば、「キャプテン・マージド」を視てサッカーをはじめた等、多くの人が子ども時代に「キャプテン・マージド」にいかにか強い影響を受けていたかわかるであろう。

グレンダイザー

日本のアニメのひとつの典型的な例は巨大メカものや戦隊ヒーローものといわれるジャンルである。そのなかでもアラブ世界においてはとりわけ「グレンダイザー」の人氣が高い。² 日本では同じ作者の永井豪の手になる「マジンガー Z」のほうが知られているだろうが、放映されたアニメの関係もあり、アラブ諸国では「グレンダイザー」のほうのはるかに知名度は高い。似たような現象はフランスなどでも見られるという。

たとえば、アラビア語版 Wikipedia で「グレンダイザー（アラビア語の正式名称は

Mughāmirāt al-Faḍā' : Grendizer、「宇宙の冒険：グレンダイザー」の項目を調べると一目瞭然である。同項目すべてをA4用紙で印刷すると、実に11頁におよぶ（2006年10月29日現在、その後も加筆が行われている）。これは同じアラビア語 Wikipedia の「ロボット」「アニメ」「マンガ」といった項目よりもはるかに充実しているのだ。項目執筆者の趣味といってしまうとそれまでだが、単に番組内容だけでなく、アラブ人の声優についてまでくわしく説明されており、他のアニメ関連項目と比較しても明らかに突出している。

また、ロンドン発行アラビア語日刊紙、シャルクルアウサト紙によれば、「グレンダイザー」は「日本製アニメの誇り」であり、放映開始から30年経過してもサウジアラビアではいぜん「グレンダイザー」のビデオに対する需要が大きいという³。そして、「グレンダイザー」のフィギュアが1体3000リヤール（日本円で約10万円）で売買されているということに驚きをもって報じている（ちなみにこの記事のタイトルは「グレンダイザーのフィギュアが3000リヤール！」である）。

さらにこの記事は興味深い事実を伝えている。記事によると、「グレンダイザー」は子ども以上に大人が求める唯一のアニメ作品だそうだ。「唯一」は大げさであろうが、実際、「グレンダイザー」のビデオやDVDの主たる購入層は30代で、全巻いっぺんに購入する、いわゆる「大人買い」のケースが多いと書かれている。つまり、子どもに見せるためではなく、自分で見るために買っているのである。「グレンダイザー」のアラブ諸国における受容のしかたは「キャプテン・マージド」のケースとは明らかに異なっているのだ。

アラビア語版 Wikipedia で「グレンダイザー」の項目が充実していることは前述したとおりだが、ふしぎなことに同じアラビア語版 Wikipedia にはいまだに（2006年末段階）「キャプテン・マージド」に関する項目がない。これが何を意味するのか正確なところはわからないが、「グレンダイザー」のコアな視聴者層が「キャプテン・マージド」のそれよりも年齢的に高いことが影響していることはまずもって間違いのないであろう。

もうひとつ、「キャプテン・マージド」との大きな違いは、「グレンダイザー」が、アラビア語の吹き替えであるが、かならずしも「アラブ化」されていないことである。たとえば、「グレンダイザー」では登場人物の名前はダイスケ、コウジ、ダンペイなど日本語がそのまま使われている。

一般に日本のアニメがアラブ世界に導入される場合、「アルプスの少女ハイジ」など名作ものを別にすれば、アラブ化される傾向が強かったが、現在ではむしろ日本語のままの場合も珍しくなくなっている。「グレンダイザー」は初期のアニメ作品としては稀有な例であるが、もしかしたら当時の日本の経済進出、ハイテクのイメージも関係しているのかもしれない。日本語、あるいは日本らしさを残しておいたほうが巨大メカもののリアリティーが増すという判断である。

1980年代には従来の安かろう悪かろうといった日本製製品のイメージはほぼ払拭され、高品質、高機能、ハイテクというプラスのイメージがアラブ諸国でも強くなってきた。その典型的な例が任天堂の進出である。当時、アラブ諸国、とくにクウェートやサウジアラビアなど豊かな湾岸産油国では日本と同じように、任天堂のいわゆるファミコン、スーパー

ファミコンが人気を得ており、多くの子どもたちがテレビゲームに夢中になりはじめていた。「グレンダイザー」のような巨大メカもの、あるいはSFアニメの人気が、任天堂のゲームやキャラクターと連動して、高まっていったことは想像に難くない。

なお、「グレンダイザー」の場合、その主題歌の人気もアラブのアニメ・ファンのあいだで非常に高いことを指摘しておこう。「グレンダイザー」の主題歌は日本語のオリジナルからの翻訳であるが、他のアニメーとくに名作ものの場合などに多い印象がある—ではアラブ側で作詞作曲された作品が主題歌になることもある。

最近の傾向

「キャプテン・マージド」や「グレンダイザー」は日本製アニメとしてはもはや古典の分類である。1990年代以降は地上波にくわえて、衛星放送が中東でも普及してきたため、コンテンツ不足は従来にも増して深刻化、日本製アニメに対する需要はますます高まっているといえる。現在では子ども向け番組専門のアラビア語チャンネル(衛星放送、一部ケー

表 1

Arabian Nights Sinbad no Boken	Idol Densetsu Eriko
Bakusou Kyoudai Let's & Go	Kamen no Ninja Akakage
Bakusou Kyoudai Let's & Go WGP	Knights of Ramune & 40
Beyblade	Knights of Ramune & 40 Fire
Bombberman Bidaman Bakugaiden	Lost Universe
Captain Tsubasa	Mahou no Princess Minky Momo
Captain Tsubasa J	Mama wa Shougaku Yonensei
Captain Tsubasa: Road to 2002	Mobile Suit Gundam Wing
Case Closed	Monster Rancher
Chosoku Spinner	Muka Muka Paradise
Cyborg Kuro-chan	Nadia - Secret of Blue Water
D.I.C.E.	Ogon Senshi Gold Raitan
Digimon Adventure	Ojamajo Doremi
Digimon Adventure 02	Patapata Hikousen no Bouken
Digimon Frontier	Robin Hood no Daiboken
Digimon Tamers	Romeo no Aoi Sora
Dragon Ball	Shin Hakkenden
Dragon Ball Movie 1-3	Slam Dunk
Dragon Ball Z	Space Warrior Baldios
Dragon Quest: Dai no Daiboken	Strange Dawn
Gekito! Crush Gear Turbo	Tokusou Kihei Dorvack
Hamtaro	UFO Robo Grendizer
Hello! Sandybell	Voltron: The Third Dimension (U.S. TV)
Hunter X Hunter	Yobarete Tobidete Akubi-chan

ブル・テレビ)も複数できており、アラブ諸国にあっても一日中、アニメ漬けも不可能ではなくなっている。現時点では日本製アニメ専門チャンネルというのは存在しないが、アニメーションの大半が日本製で占められているというのはアラブ諸国だけの特殊な現象でないことはいまでもない。

子ども番組専門チャンネルとして有名なものに MBC3 と Spacetoon というチャンネルがある。前者はサウジ資本の MBC (Middle East Broadcasting Center) の子ども向け部門であり、後者はシリア系とされる。ただし、両方とも本拠地をアラブ首長国連邦のドバイに置いている。ドバイにはメディアに対する優遇措置のあるドバイ・メディア・シティという特区があり、その利点を活用しようとしているわけだ。

両社ともメインはアニメーションであり、その多くを日本製アニメが占める。表1は Spacetoon で放映されていたアニメーションのラインナップであるが、ほとんどすべてが日本製アニメである。

アラブ諸国で人気のアニメ

アラブ世界でどのような日本製アニメが人気なのか、対象国が多すぎることもあって、はっきりとはわからない。2006年7月1日付シャルクルアウサト紙は、サウジ人の好む1970年代から1980年代のアニメーションやマンガのキャラクターとして「アドナーンとリーナー『Adnān wa Linā (未来少年コナン)』、「ハロー！サンディベル」、「(アルプスの少女)ハイジ」、「小公女 Sālin」、「シンドバードの冒険」、「小さなルル Little Lulu」などを挙げている。⁴ このうち「小さなルル」だけはアメリカの古典マンガであるが、それ以外はすべて日本製アニメである。しかし、他の湾岸諸国ならまだしも、この傾向を政治・経済・社会状況が異なる他国にそのまま当てはめることはむずかしい。

ちなみに、2006年12月現在の MBC3 のウェブページでは「遊☆戯☆王」や「デュエル・マスターズ」を売りにしている。また Spacetoon では「タマ&フレンズ」、「ソニック X」、「名探偵コナン」、「爆転シュート・ベイブレード」、「アルプスの少女ハイジ」、「とっとこハム太郎」、「爆走兄弟レッツ & ゴー!!」などを放映している。

もうひとつ、かならずしも総体的な人気度をはかる基準にはなりえないとしても、大き

表2

未来少年コナン	デジタルモンスター
名探偵コナン	おにいさまへ…
ドラゴンボール	モンスターファーム
ONE PIECE	ドンチャック物語
BLEACH	NARUTO ナルト
犬夜叉	+Blood
太陽の王子 ホルスの大冒険	グレンダイザー
天地無用!	

な関心をもっているファンがいるという意味で、アラビア語版 Wikipedia で項目になっているアニメやマンガをみてみよう。筆者が気づいたかぎりではあるが、項目名として立っている日本のアニメ・マンガには表2のようなものがある（2006年末段階）。

このうち「おにいさまへ…」は池田理代子原作のいわゆる少女マンガで、それ以外は少年マンガ、あるいは男女無関係のジャンルである。また「未来少年コナン」、「太陽の王子ホルスの大冒険」、「ドンチャック物語」などは名作・教訓ものといえるのに対し、そのほかの作品は冒険活劇系と分類される。

またこれまで紹介したものの以外では、シャルクルアウサト紙では、「おジャ魔女どれみ」、「ヒカルの碁」などが人気作品として紹介されている。⁵

これらのラインナップからみてアラブならでは、あるいは中東ならではの特色を挙げることは難しい。いずれも、日本や欧米・アジアでも人気のある、あるいは、あった作品が多いからである。

逆にアラブ諸国以外では人気なのに、アラブではあまり人気のない作品というものもある。たとえば、「ドラえもん」がそれだ。「ドラえもん」はアラビア語で「アブクール ‘Abqūr」と呼ばれ、湾岸諸国を中心に1990年代中ごろから放映されていたが、新聞などマスメディアで取り上げられることはなく、アラビア語版 Wikipedia でもまったく言及されていない。またアラビア語のインターネット上で「ドラえもん」について語られるケースも、他の作品と比較すると、そして「ドラえもん」のアジアでの人気を考慮すると、きわめて少ないといえるだろう。

もうひとつ、アラブ世界でほとんど言及されないが、それ以外では大ヒットを飛ばしていたアニメがある。いわずとした「ポケモン（ポケットモンスター）」である。この作品がアラブ諸国で排除されていった経緯については後述する。

アラビア語としてのアニメ

アニメ人気が高まるとともに、アニメやマンガという日本語もとくに湾岸諸国においてかなり一般化してきた。アラビア語版 Wikipedia でも「アニメ」および「マンガ」の項目があり、アニメーションやカートゥーンといったより一般的な用語とは明確に区別しており、その特異性を彼らがきちんと理解していることがわかる。

とはいえ、アニメもマンガもアラビア語として完全に確立したわけではないことは、これらの言葉の綴りが安定していないことから推測できる。たとえば、前者の場合、アラビア語ではしばしば *Animī*, *Animi*, *Anim* など微妙に異なるし、後者の場合は、*Mānjā*, *Mānghā* のふたつが並立している。これはアラビア語の発音や地域差の問題でもあり、たとえば、あれほど人気があるといったグレンダイザーでさえ、その綴りがかならずしも一定していないのである。

しかし、「アニメ」というアラビア語自体は日本製のアニメーションを指す言葉としてほぼ定着しており、綴りもいずれ統一されていくであろう。最近では、少なくとも仮想空間上においては「オタク」というアラビア語 (*Ūtakū*) も一般化しつつあり、たとえば、

Arab Otaku.com のように「オタク」の名を冠するサイトまで登場してきている。

アラブの子どもたちが日本製アニメに夢中になるというのはここでは取り立てて重要ではない。彼らの大半はディズニーも含め、欧米製のアニメーションも分け隔てなく視聴しているからだ。問題になるのは、日本のアニメやマンガに対するコアのファンの急増であろう。

しかし、アニメ・ファンとそうでないものの差はいぜんとして大きい。前に引用したシャルクルアウサト紙の記事はこのギャップを面白おかしく描いている。⁶ 記事のタイトルは「インターネットのアニメ・フォーラムはアクセス数で政治や文化関係のフォーラムに匹敵」という。サウジアラビア西部の商都、ジェッダ発の記事である。

ここでいうフォーラムとは日本でいうところのインターネットの掲示板である。掲示板は2001年以降、アラビア語の仮想空間上でもっとも急激に発展してきた形態で、とりわけこのアニメ・マンガ関連、そしてイスラーム系（ジハード主義系）の掲示板の活動は活発で、この記事ではそのうちのアニメ・マンガ関連サイトをあつかっている。

まず冒頭で「(アラビア語の) アニメ・マンガ関連フォーラムの数は90近くになる」と指摘されている。これが多いのか少ないのか比較の対象がないのははっきりいえないが、実感としては妥当なところであろう。

つぎに記者は、こうした掲示板にアクセスしても日本語の用語が頻繁に使われているため、暗号のようで何をいっているかわからないという。記事中「サーヤンズは不思議な人で、人間に似ているが、猿のような尻尾をもっていて、フィージター星に住んでいる」という文章が紹介されている。一定年齢以下の日本人であれば、これが「ドラゴンボール」のことで、サーヤンズはサイヤ人、フィージターはベジータであることは自明であろう。

シャルクルアウサトのようなアラブ世界全域をカバーするクオリティーペーパーで日本製アニメ関連の記事がしばしば掲載されるようになったことは、すでにアラブ世界でも日本のアニメやマンガが、少なくとも若い世代においては根づいてきたことを示す。だが、この記事は、いぜんとして熱心なアニメ・ファン（地元のオタク層）とそうでないもののあいだの乖離が小さくないことも表わしている。また、この記事ではアニメのジャーゴンの問題だけが取り上げられているが、実際にはアニメ・ファンの日本語、あるいは日本文化への関心はしばしば濃密に重なっている。これについてもあとで触れなければならない。

ポケモン事件

日本製アニメの海外での受容を語るのに「ポケモン」は欠かせない。ご多分に漏れず、アラブ諸国も2000年の段階でポケモン・ブームの渦に巻き込まれていた。ただ、この初期の時点では、他のアニメのケースでもしばしば見られることであるが、主たる視聴者である子どもだけが熱狂し、親たちは「ポケモン」が何たるかほとんど気づいていなかった。

アラブ諸国の新聞では2001年はじめごろからようやくポケモン・ブームの凄さを理解するようになったが、そのときにはもうピカチュウがアラブ諸国を席卷していたのである。「ポケモン」が従来のアニメ・ブームと大きく異なっていたのは、アニメとゲーム（任天堂）

とカード、そしてその他もろもろのキャラクターグッズがいったん押し寄せてきた点である。

アラブ諸国の新聞では、当初から「ポケモン」に関する記事はつねにその経済的な側面とセットになっていた。たとえば、ハヤート紙によると、中東最大といわれるドバイ・ショッピング・フェアにおける2001年の目玉はポケモン・ショーであった。⁷

すでにこのころには世界中で「ポケモン」をめぐるさまざまな事件・事故が発生していたが、アラブ諸国でも遅まきながら、「ポケモン」に関してネガティブな報道や発言がぼろぼろと出はじめる。ヨルダンの英字紙、スターは、「ポケモン」を文化侵略と結びつけるような記事を掲載、子どもへの悪影響を懸念した。⁸ また報道ではないが、同年3月17日、サウジアラビア教育省ウェブサイトの掲示板に「ポケモンになりたい」という書き込みがあった。⁹ これは、サウジアラビアの学校のなかで子どもたちが文字どおり「ポケモン」まみれになっている状況を嘆くもので、外国で「ポケモン」をめぐる殺人事件が発生していることなどを引き合いに出しながら、「ポケモンはわれわれの子どもたちの知性を剥奪し、彼らの理性を侵略している」とし、一刻も早く「ポケモン（・ゲーム）」をなくすよう呼びかけている。

そして、この書き込みが耳に届いたのか、サウジアラビアの最高宗教権威、総ムフティー、アブドゥルアジーズ・アールッシェイフを長とする科学研究・ファトワー恒久委員会がサウジアラビアのアラビア語日刊紙ジャジーラで、「ポケモン」をハラーム（イスラームで禁止されること）であるとするファトワー（宗教的見解）を出したのである。¹⁰

もちろん、「ポケモン」が禁止されたのはサウジアラビアだけではない。アメリカやイギリス、さらにはアジア、中東においても「ポケモン」はしばしば禁止措置を受けていた。問題はサウジアラビアの場合、「ポケモン」禁止の理由が他国で見られるような教育上の理由ではなく、あくまで宗教的な、そして政治的な理由だという点である。¹¹

アールッシェイフによると、「ポケモン（・カード）」にはギャンブル性があるという。当時、サウジアラビアではポケモン・カードは1枚2000リヤールから3000リヤールで取引されていた。日本円では1万円程度である。いうまでもなく、イスラームは宗教上、賭博を禁止している。いたずらに射幸心を煽るポケモン・カードは賭博に相当するというのだ。

第2点は進化論である。「ポケモン」のキャラクターは進化する。これがダーウィンの進化論を連想させるわけだ。イスラームはキリスト教の一部と同様、進化論を禁止しており、「ポケモン」はこの禁忌に抵触することになる。

さらにアールッシェイフは「ポケモン」の宗教性を指摘する。ポケモン・カードにはさまざまなマークがついていて、そのなかにはたとえばキャラクターのエネルギーを示す六芒星がついているが、アールッシェイフによれば、これはダビデの星だというのである。つまり、「ポケモン」はシオニズムを支援していると説く。また、キリスト教を示す十字架であるとか、フリーメーソンリーを表す三角形、あるいは神道を示すマークなどもある由。これらはいずれもイスラーム以外の信仰を広めるための道具だというのだ。

このうちポケモン＝イスラエルの手先説については、すでにアールッシェイフ以前から

さまざまな噂が流されていた。たとえば、「ポケモン」というのは日本語で「わたしはユダヤ人である」という意味だとか、ピカチュウはやはり日本語で「ユダヤ人になれ」という意味だとかである。むしろサウジアラビアのファトワーではこれら俗説には触れられていない。またインターネット上のアラビア語空間でもこの俗説が取り上げられることは、少なくとも2001年の時点ではまれであった。これらはむしろ英語の世界での反ユダヤ的陰謀論の枠組で考えるべきであろう。

このファトワーで展開された議論が正しいかどうかはここでは問わない。少なくとも任天堂は否定している。しかし、任天堂の主張は一顧だにされず、このファトワーによって、テレビで放映されていた「ポケモン」のアニメは中止され、サウジアラビアを筆頭とする湾岸諸国から「ポケモン」のカードやグッズがいっせいに姿を消してしまったのである。その後、2001年4月にはサウジアラビアの首都、リヤドの小学生600人以上が自分たちのもっている「ポケモン」関連グッズを反イスラームとして処刑する（＝燃やす）という出来事があった。¹² この「ポケモン」事件は、日本のアニメがイスラーム世界で受けた最初のネガティブな反応だといえるだろう。

現在でもサウジアラビアや湾岸諸国では「ポケモン」はタブーになっている。しかし、同じアラブの国でもエジプトやレバノンでは「ポケモン」は禁止されなかった。実際、レバノンではシーア派の高位法学者、大アーヤットウッラー、ムハンマド・フセイン・ファドラーが、「ポケモン」は合法であるとのファトワーを出しているし、¹³ 2001年3月以降もレバノン各地でアラブ人の俳優を使って「ポケモン」の着ぐるみショーが上演されていた。

またポケモンを放送していたMBCは、「ポケモン」の放送を中止したが、その後、「デジモン（デジタル・モンスター）」という「ポケモン」に似た番組の放送を開始した。どうして「ポケモン」がダメで、「デジモン」がOKなのかはよくわからないが、現在でもサウジアラビアでは「デジモン」は放送されている。「ポケモン」や「デジモン」にかぎらず、アニメのなかにはその世界観、宗教観、道徳観でイスラームと抵触するものが少なくないはずだ。そのなかで「ポケモン」だけがなぜ槍玉に挙げられたのか、明確な答えはまだない。おそらく「ポケモン」が目立ちすぎたため、スケープゴートになったというのが一番納得がいく。となると、いつなごき他のアニメが標的になってもおかしくないことになる。

アラビア語インターネット上のアニメ関連サイト

1990年代後半以降、とくに21世紀になってからは、アラブ諸国のアニメはインターネットとともに発展していく。既述のとおり、数多くのアニメ関連サイトが作られるようになったのはその証左である。アラビア語のアニメ関連サイトは大まかに二つにわけられる。ひとつはアニメのビデオやDVDなどの販売サイト、あるいは無料のダウンロード・サイトである。後者の場合、著作権上非合法的なケースがほとんどであろう。¹⁴

もうひとつは掲示板（フォーラム）である。インターネット上ではさまざまな言語別に、

数多くのアニメ関連の議論や情報交換を行うための掲示板が構築されており、これはアラビア語でも例外ではない。たとえば、アラビア語でもっとも人気のあるアニメ関連掲示板として、**Arabic Anime Club** というサイトがある。全体としてはもちろんアニメ関連だが、内部は細かいスレッドにわかれ、それぞれテーマ別にアニメの評論や紹介、アニメに関する情報交換などいろいろな議論が展開されている。こうした場所ではしばしばアニメだけでなく、日本に関する議論が行われていることは注目しておいていいだろう。

しかも、その議論は日本のハイテク機器や伝統文化といった従来型のテーマ以上に、日本語や日本の流行といったより身近なテーマが中心となっているのだ。たとえば、日本の「メイド」ファッションなどもそうだし、あるいは安室奈美恵やジャニーズ系など日本のアイドルに関する議論なども行われている。

また、アニメを読み、理解するための日本語講座なども人気のあるスレッドである。ほとんどすべてのアラビア語アニメ掲示板にはこのスレッドが設置されている。今のところ、大半が初心者向けであり、挨拶の言葉だとか、文字の練習だとか、そんなレベルであるが、ときおりアラブ人同士が日本語で議論していたりして、たいへん興味深い。実際、近年世界中でアニメが日本語学習の大きなインセンティブになっており、アラブ諸国においても同じ現象が見られるわけだ。

アニメ関連フォーラムのテーマ

また別のケースでは日本のアニメやマンガのアラビア語訳が行われている。たとえば、**Anime For Arab** というサイトでは「ペンギン☆ブラザーズ」という作品のアラビア語訳が投稿されていた。日本語のオリジナルの作者は椎名あゆみで、いわゆる少女マンガのジャンルである。2000年2月号から2001年12月号まで雑誌『りぼん』に連載されている。日本でどれぐらい有名なかはわからないが、かならずしも誰でも知っているという類のものではないはずだ。

重要なのはこのマンガはアニメ化されていないという点である。通常、アラブ諸国では日本のマンガよりもアニメのほうが通りがいい。これは地上波や衛星放送などアラビア語の公式のルートで視聴できるからである。紙に印刷されたマンガは一部粗雑な海賊版を除けば、ほとんどまったくといっていいぐらい入ってきていないはずである。つまり、「ペンギン☆ブラザーズ」のアラビア語訳をつかった人物は、アラブ諸国における公式ルート以外でこの作品を知り、入手し、翻訳したことになる。おそらく著作権法には抵触しているのであろうが、こうした新しいかたちのアニメ・マンガの拡散・浸透というのはインターネット時代ならではである。

こうした非公式「翻訳もの」の製作者がどの程度日本語ができるかどうかはわからない。実際、この「ペンギン☆ブラザーズ」もはたして日本語から直接アラビア語に訳されたかどうかは不明である。主人公の名前「三嶋陽菜 (みしまひな)」がアラビア語版では **Hāynā Mishima** になっていることから、英語版があって、そこからの重訳である可能性が高い。

また、インターネット上のアニメの浸透がアラビア言語空間に興味深い現象を惹き起こしていることにも注目していただろう。それは、口語（アーンミーヤ）の問題である。アニメが子ども向けと考えられていたことは前述した。だからこそ、多くのアニメがアラブ化されていたのだが、この場合のアラブ化はしばしば教育上の配慮をとまなっており、したがって、地上波、衛星を含め公式ルートで放映されるアニメはほとんどすべて正則アラビア語に吹き替えられる。ところが、それに対し非公式ルートで散らばるマンガやアニメはしばしば口語で訳されるという大きな特徴がある。正則アラビア語は日本語では文語に相当し、聞き手にとっては相当堅苦しさを感じることもある。作品の趣旨や性格からいっておそらく口語で訳したほうがはるかにふさわしいはずだ。実際、アニメ関連フォーラムでもそうした議論が頻繁に行われており、非公式ルートのアラビア語訳の多くが口語であるのはこうした議論を踏まえてのことである可能性も高い。

「萌え」の世界

中東におけるアニメ・マンガ人気を考える場合、日本のアニメの性的な側面を無視することはできない。公式ルートで流れるアニメやマンガは基本的には日本国内、および現地テレビ局と二重の検閲を経ており、女性の裸やそれを連想させる場面は修正が施されているのがふつうである。

一方、インターネットのフォーラム、すなわち非公式ルートでは「萌え」系と分類される女性（少女）の画像が満載である。だが、裸や水着の画像はほとんどまったくといっていいほど見られない。これはムスリムとしての道徳的矜持ともいえるが、フォーラムのサーバの多くがサウジアラビアやアラブ首長国連邦などインターネットそのものが厳しい検閲下に置かれている国にあることとも関係するかもしれない。ポルノまがいの画像やビデオを投稿したら、フォーラムそのものが当局によって閉鎖されかねないのである。

テレビや衛星放送の影響でアラブ世界では一般にはアニメが優勢だと書いたが、インターネット上ではマンガの人気も高い。著作権をクリアしたアラビア語訳されたマンガがアラブ諸国ではほとんど入手できないことを考えると、このマンガ人気の高さをどう考えるべきか。おそらく英語訳されたマンガからの間接的な読者が中心と思われるが、英語を中心とする欧米語訳およびそこからのアラビア語訳だけで、これだけの人気を維持できるというもある意味驚きである。

余談であるが、こうした画像、あるいはビデオ・ファイルは、アップローダといわれるサイトにアップロードされ、フォーラムの投稿中にリンクが貼られるのがふつうである。2003年ごろから2005年ごろにかけてアラブのアニメ・ファンたちはよく日本の無料アップローダを利用していた。実際、インターネット上には日本のアップローダを利用するためのノウハウを記した文書が出回っていたぐらいである。また、アニメ・ファンが利用していたのと同じアップローダをジハード主義系の組織、あるいは支持者たちがジハード（テロ）の残虐な犯行ビデオや声明を置くのに利用していたこともよく知られている。ジハードとアニメという相反するアラブのファイルが同じ場所に保管されていたという事実。両

者に何らかの接点があったかどうかはわからないが、非常に興味深い現象であった。いずれにせよ、こうした闇の部分については今後何らかの対応が必要となるかもしれない。

アラブ女性とアニメ・マンガ

アラビア語のアニメ関連インターネット・フォーラムで特徴的なのは男女が同一の場に参加している点であろう。血縁関係・婚姻関係をもたない男女が物理的に同じ場を共有することはイスラームの戒律上タブーであるが、サイバー空間上ではそうした禁忌はあまり意味をなさないようだ。多くの女性たちがこうしたフォーラムで積極的に発言を行い、みずから率先してスレッドを立ち上げている。もちろん、「彼女たち」がほんとうに女性かどうかはわからない。あくまで自己申告である。しかし、アニメ・マンガ・ファンのなかに多くの女性が含まれていることは間違いない。とくに少女マンガに対する入れ込みはかなりのもので、アラビア語でもしばしば少女マンガ (Mānjā al-Shūjū) と呼ばれ、日本語の語感どおり正確に理解されている。

たとえば、アラビア語アニメ関連フォーラムの老舗、Animes Club のマンガ・コーナーにおいて 2006 年末段階で一番活発な議論が展開されていたのは「NANA」に関するスレッドである。¹⁸ その時期までで投稿数は 240 近く、訪問者の数も 6000 近く、他を圧倒している。とはいえ、実際に投稿しているのはコアな女性メンバー、7、8人で、ときおり男性からの冷やかしが入る。投稿の多くはサウジアラビアやアラブ首長国連邦など湾岸諸国からである。何人かはハンドル名にも「トキメキ」「ハチコー」¹⁹ など日本語らしき言葉を使っており、投稿のなかにも頻繁に日本語や英語（彼女たちが読んでいるのはおそらく英語版の「NANA」であろう）が混在する。

「萌え」系の男性ファンの問題も重要だが、こうしたアラブの女性たちにおける日本の少女マンガの受容のしかたは、アラブ・イスラーム社会、とくに湾岸諸国における女性の地位を考えると、きわめて重要な研究テーマとなる可能性もある。たとえば、非常に興味深い例として、実際に自分でマンガを描きはじめたというサウジ人女性の例がある。サウジアラビアの英字紙、アラブ・ニュース紙は、何人かの若いサウジ人女性がジェッダで自分たちの描いたマンガの展覧会を開くと報じた。²⁰ 彼女たちはおそらくインターネット上のアラビア語化、あるいは英語化された日本のマンガを読んでいるのだろう。マンガ好きが嵩じて自分でもマンガを描きはじめ、また日本語の勉強もはじめたという。記事のなかでは彼女たちが描いたマンガの一部が紹介されているが、キャラクターの姿かたち、コマ割、吹き出しのつけかたなど、日本の少女マンガの影響は濃厚である。

現在のところアラブ諸国のコミックス市場においては、この女性による女性向けマンガという商品はまったく未開発である。しかし、インターネット上のマンガ関連フォーラムでは、前述のように、多くのアラブ人女性が参加している。またアラブ人の男性のなかにすら、女性向けコミックスのファンが存在することを考えると、この分野の産業としての将来性を真剣に検討してみる必要もあるだろう。

おわりに

このサウジ人女性たちはまだアマチュアであるが、アラブ人のなかから、単なるアニメ・ファンではなく、みずからクリエイターを目指す人たちが出てきたことは大きな進展であろう。市場化まではまだ時間がかかるにしてもアラブ人のプロの作家のなかにも、日本のアニメからの影響を受けたものが出はじめている。また、マンガの勉強、マンガの研究のために日本語を学ぶ、日本に留学するという時代がもうすでにやってきていることもきちんと認識しなければならない。

しかし、アラブ諸国の大半はきわめて保守的であり、彼ら、あるいは彼女たちがいくらアニメ・ファンだからといって、それぞれの国の公の場で自由にコスプレを楽しむことができるとはとうてい思えない。仮に日本側から何らかのアプローチの必要があるとするならば、イスラームの信仰、現地の文化・慣習を尊重した、慎重な対応を心がけなければならないだろう。

いずれにせよ、日本とアラブ世界の人びとはおそらく歴史上はじめて、アニメやマンガを媒体として共通の文化的背景を直接的な実体験として共有するようになった。このことの意義は少なくないはずである。

1 *al-Zamān*, March, 11, 2006.

2 日本語の正式タイトルは「UFO ロボ グレンダイザー」である。

3 *Asharq al-Awsat*, February 12, 2005.

4 *Asharq al-Awsat*, July 1, 2006.

5 *Asharq al-Awsat*, August 25, 2005.

6 *Asharq al-Awsat*, August 25, 2005.

7 *al-Hayat*, March 19, 2001. ハヤート紙はロンドン・バイルート発行のアラビア語日刊紙、シャルクルアウサトと同様、サウジ資本。

8 *The Star*, February 25, 2001.

9 http://www.moe.gov.sa/archive_m/irshad/show.asp?ID=161

10 *al-Jazīra*, March 25, 2001.

11 サウジアラビアで反ポケモンのファトワーが発出されたのち、隣国カタルでも有名なイスラーム法学者、ユースフ・カラダーウィーが「ポケモン」をハラームとするファトワーを出している。

12 *al-Jazīra*, April 14, 2001.

13 http://www.ibeneljnoub.com/bayynat_files/nacht.html (2002年10月1日段階)。ファトワーが出されたのは2001年4月10日。

14 たとえば、<http://www.arabiccartoons.net/> など。

15 <http://www.anime4arab.com/vb/>

16 たとえば筆者が発見したものには、*al-Taṭīqa al-Dhakīya li-Istikhrāj Mawāqī ‘al-Taḥmīl al-Majjāniya* というファイルがある。「無料アップローダの賢い使いかた」というような意味である。このファ

イルの作者は、筆名などからおそらくサウジ人のジハード主義者、あるいはその支援者と見られる。

17 アラビア語のジハード系フォーラム（掲示板）で、たとえば「グレンダイザー」の名が引用された書き込みがあったことは興味深い。2006年11月、ルイス・アターというハンドル名をもつ人物は国際テロ組織カーイダ（アルカイダ）を賞讃する文章を掲示板に投稿、そのなかで「アメリカ人一般大衆はカーイダのことをグレンダイザーだと見なしている」と書いている。「（グレンダイザーは）第7発進口から滝の裏から飛び出てくる」という描写などはかなりのファンと見受けられる。

18 <http://www.animesclub.com/>

19 「ハチコー」は「NANA」の登場人物の1人。

20 *Arab News*, March 30, 2006.

21 *The Daily Star*, May 20, 2004.